人生は対応のバリエーション

宮井　研治

-第５話　私説「岡田隆介」論　-

「対応のバリエーション」は、私たちが仕事で出会う様々な「対応」場面をロールプレイで再現し、いろんな対応の仕方を試してみて、感じたことを自由に話し合おうというワークショップ式体験学習です。ゲームみたいな感覚でみんなで楽しみながら、実は、その中から何か日常の業務に役に立つものを持って帰っていただけたらと思っています。　（「そだちと臨床」研究会主催　対応のバリエーション勉強会のお知らせより）

まえがき

なぜ、今これを書くのか？

単純に、岡田さんの考え方、言わんとするところ、雰囲気が自分にフィットして、自分の臨床で使い回してきました。感謝です。お礼の意味もこめて、この文章を書き始めたいと思います。ある種の天才は、解説しないと誤解に終わってしまうことがあると思います。岡田さんの場合は、これだけ後輩（特に若い人にはウケがよいと思います。そこは、ご本人が一番意識して取り組んでいることだと思います。岡田さんの新もん好きにも符合しています）に、慕われているのであるから、誤解に終わる心配は稀有でありましょう。それでも、かの天性を伝えておきたい使命感に駆られるのは何故でしょう。そんな自分への問いから、この小論説を始めたいと思います。もちろん、捉えどころのなさが氏の魅力でもあるので、私が関わりの中で勝手に形作っていることも含まれるのはお許し下さい。たぶん、この小論説の掲載号を読んでもらっても、「あかんわ、やっぱり俺誤解されてるわ。昔からずーっと誤解されてきたしなあ」と本気とも嘘ともつかない表情で遠い眼差しをするのでしょうから。

１.さん付け無用の哲学

冒頭から、敬愛する岡田さんと評しながら、なぜ岡田先生とは呼ばないのか、違和感を覚えた読者もおられることと思います。そこには、岡田さんや、岡田さんの盟友でありこの対人援助学マガジンの編集長の団士郎さんも含めたある種の哲学があるからです。振り返れば、30 年ほど前に開かれた「児童相談所とその近接領域における家族療法・家族援助の実際」の第一回目の研修会（京都嵐山）でのこと。その頃のわたしといえば、児相デビュー4、５年の若い一判定員でした。でも、児相以前に知的障害児施設でそれなりの経験を積み、少しの自信とその倍はあるこれからの不安を抱えていたことを覚えています。そう、誰もが通る道と言えばそれまでですが。お二人はその研修会の

言い出しっぺであり、具体的な創設者でした。その研修会の冒頭の挨拶で、「ですから、この研修会期間中は、お互いにさん付けで呼び、決して先生とは呼びあわないこと。これがこの集まりの基本的なルールのひとつです。」と聞かされたわけです。かなり、びっくりしました。さん付けで呼ぶことなど、一見簡単そうですが実際社会人としての習慣を捨てることは、期間限定としても違和感はありました。しかしながら実行してみると、勝手に思い込んでるヒエラルキーから離れられたり、組織ではなく個人として在ることを意識させられたりの研修会でした。これは岡田さんの書籍にもよく登場するくだりの「変えられるのは行動で、まずやってみて。心なんてあとから付いてきます」の実践のようでした。もっとも、岡田さんなら行動先行で行き詰まってばかりのクライアントには、別の理由付けで心の方の処方箋を出すのでしょう。この辺りが、行動療法と一線を画すところなんでしょうが（知らんけど）。

2.「お笑い」が源泉、受けてなんぼ

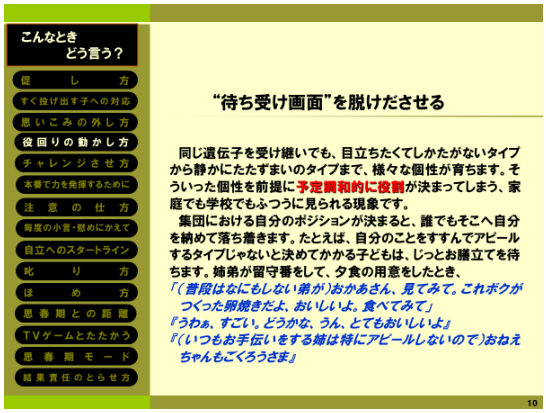
岡田さんを語る上でやはり「お笑い」はとばせないアイテムでしょう。これは、冗談ではなく、真面目な話です。アカデミックな話へのすり替えの必要は感じませんが、かのミルトン・エリクソン先生もセラピーにおいていかにユーモアの活用が大切かを説いておられたように記憶しております。岡田さんは、かつて、子どもの個性を伸ばす、あるいは殻を破るコミュニケーションスキルの方法として「ノリ、ウケ、オシエ」という標語のような言葉を使っていたことがありました。これは、予定調和的な役割り、たとえば家族での長男、長女役割り（お兄ちゃんだから、できて当たり前的なロール。別にそれ自体は悪いことはないが、それが固定化すると息苦しさに通じたり、家族の成長の阻害要因になったりする場合は相談の取り扱い対象ともなり得る）を脱するために、来談者ができることとして、岡田さんが母親に紹介する処方箋の一つです（図１）。このノセて、ウケてあげて、最後オシエるという一連の行程がいわゆる関西のお笑い文化に底通していると岡田さんは思っていると思います。ご本人には確認してませんが、間違いありません。単にこの過程をSSTや心理教育の側面でも伝えることは可能でしょう。実際、岡田さんも補足説明として、SSTや心理教育のタームを使用します。ダブルミーニングですね。しかし、「ノリ、ウケ、オシエ」をうまく使ってもらうには、関西のノリは必須でしょう。

岡田さんの面接には、「お笑い」の要素が必須です。この辺りまでご理解いただけたでしょうか。関西の「お笑い」芸能の王道は、しゃべくりでしょう。いとしこいし-やすきよ-ダウンタウン-中川家-ミルクボーイ、この系譜にうなずかれるなら、かなりの漫才通、関西贔屓でしょう。もちろん、このお笑いの要素を岡田さんが研究していることは間違いありません。中川家なんて大好きでしょう、たぶん。しかし岡田さん自身の芸風（治療スタイル）は、前述のどの漫才師のそれとは一致しません。ずばり、ヒロシと小梅太夫がドンピシャです。みなさんご存知かと思いますが、決してメジャーとは言えません。すでに、関西の芸人さんでもありません（笑）。今でこそ別の分野（ソロキャンプ）で存在感を示しているヒロシですが、基本

的に自虐ネタで売り出した芸人です。小梅太夫に至っては、皆さんあまりご存知ないかもしれないし、ブレークも中途半端でした。こうした超メジャーではないけど、マイナーでもない、こんな立ち位置を岡田さんは、治療者像として求めているように感じてきました。対象となる子どもへの治療者の立ち位置を、たとえて言えば、「父親や母親と同じでは、近すぎて聴く耳もたんでしょう。濃すぎる。盆暮や、たまの法事で出会うぐらいの親戚のおじさん辺りの立ち位置の人の話って、けっこう子どもらは聞くのよねぇ」ほんとに？と思いながらも、何となく説得力のある説明です。

最初の嵐山での出会いから、岡田さんの話の面白さ、たとえ話（メタファーの使い方）の絶妙さ、独特のノリ（最初は広島のノリなのかと思ってましたが、ご本人はご自身のことを根無し草のように言います。ちょっと気障です）に魅了されました。人見知りもされる方だと思いますし、最初からスムーズになんとなしのお付き合いから、もう３０年近く経ちますので、ありがたいことだと感じています。たぶん、すぐにお近づきになれたのは、私が大阪市の児童相談所所属、つまり、お笑いのメッカ出身のやつということもあったんじゃないか、これは邪険に扱えんけんねという配慮が働いたんではと思っています。残念ながら、私の出身は九州の大分です。

岡田さんは、治療者としても、同業者への研修やワークショップでの講師としても、いかにその時間に「ウケたか？」ということにこだわります。自虐ネタとしてウケなかったことを取り上げることはしますが、ウケたかウケなかったかというのは、ただその言葉の意味以上に、その場を治療者としてコントロールできたのかということにフォーカスしているように思います。コントロールという言葉に語弊があるなら、治療者（料理人、仕立て屋）としてクライエント（客）に満足してもらえたか（味わってもらえたか、満足してもらえたか）に主眼を置いて仕事をされてこられたように見受けられます。もちろん、症状の軽減・消失はメインディッシュのひとつでしょうが、それだけでは満足されないのでしょう。「めっちゃ、面白かった」「どきどきした」「一時はどうなるかと思ったけど、腑に落ちた」「お腹いっぱい」「また、いつかそんな機会があればお世話になりたい」このようなプラス一言が、岡田さんの治療への原動力になるのではなかろうか。治療者として欲深い人だと思うのです。だから、私が岡田さんと同じ研修会での講師などをした後で、開口一番に聞かれるのは「で、宮井君ウケたの？ウケなかったの？」ということです。あまりウケたと言い過ぎても、気を悪くされます。これは誇張ですが、自分よりウケるなよというような雰囲気もあります。さりとて、岡田さんの講演を実際目の当たりにし、ぐいぐい引き込まれ、そこにいた聴衆が異口同音に賛辞を贈ろうともご本人は「あかんわ。終わってるわ。」と引き気味な発言をすることがだいたいです。自虐的に自己評価するときは、だいたい手ごたえを感じられているときです。長年の付き合いでわかるようになりました。面倒くさいですが、このあたりのやり取りも楽しいものです。



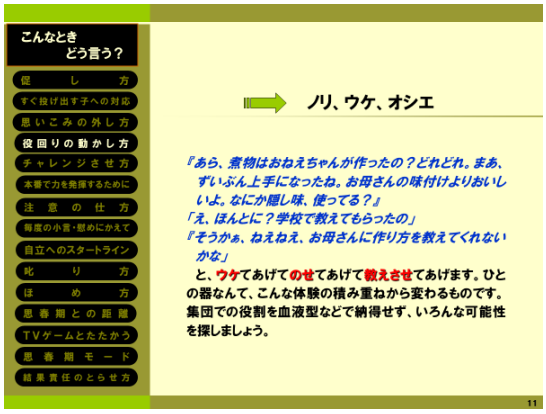


図１（「こんなときどう言う？ 家庭教育編セリフ入り」　岡田隆介作成）

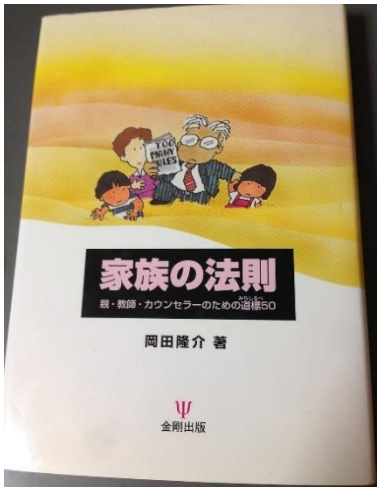
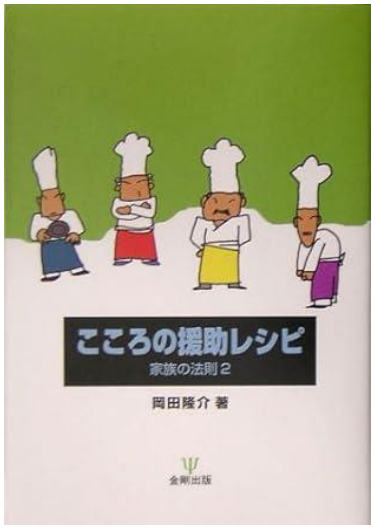
3.メタファーの魔術師

いくら名言を吐こうとも、それを他者が受け取り、自分のものとして納めてくれなければ、迷言へと堕してしまう場合もあります。メタファーそれは、「比喩表現を使うことによって、相手に物事をわかりやすく伝えたり、表示物の視認性を高めたりできる手法です。文章だけでなくデザインのテクニックとしても広く使われています。」（indeed.com よりの参照）まさに治療デザインの色合いを決めるチャートのようなもの（よくわかりませんが）。

岡田さんの言葉のチョイス、センスとTPO ですが、これはどこから、どのように して、鍛えてられてきたのかは定かではありません。しかし、「家族の法則２ こころの援助レシピ」（金剛出版 2005）の冒頭の一節にこんな書き出しがあります。先輩の精神科医が、“いつも癒しのオーラを出していたが、いつまで待っても自分からはいっこうにそれが出なかった。それが後になってセールストークや援助技術を学ぶきっかけになった。” どうやら、岡田さんはそのキャリアのずい分早期から、他の同業者とは異なる自分自身のスタイルを模索してきたことがうかがえます。これは簡単ではなかったことでしょう。盟友である団士郎さんや、家族療法というつながりの東豊さんという存在はいますが、精神科医療畑では違った意味で孤独な立ち位置を歩まれてきたのではと勝手にリスペクトしています。メタファーは言葉や文章だけ取り上げても、そのメタファーが岡田さんの口から発せられた文脈（コンテキスト。個人面接において、悩める母親にかけた一言なのか。家族面接の終わり際になにげに家族全員に投げかけた言葉なのか。ヒートアップする夫婦喧嘩に対して浴びせた逆説的一撃としての言語なのか。そこには状況における差異が生じて当然です）によって、色合い、意味合い、説得力を変えていきます。

文脈も加味しながら、岡田さんのメタファーである言葉や文章をご紹介していきましょう。前述のようにご自身のことを洋服の仕立て屋になぞらえたり、料理人にたとえたりはよくされます。それに続くように治療プランのことを「レシピ」という言い方をされていた時期もありました。推測ですが、メタファーの大枠としての着想が、技を持っている人、手に職を持つ人からきてい

る感じはします。聞いたことはありませんが、岡田さん自身が、たぶん、ほんとに料理人や仕立て屋さん、手先一つで何かを作る人になりたかった子どもではなかったのかと想像したりします。料理系シリーズのメタファーとしては、家族の考える不調和・不適応の原因を、「お客の持ち込む食材」と例えたりします。この場合、家族が持ち込んだ不調和や不適切の原因を、即座に廃棄するのではなく、如何に扱うのかという治療プランや面接の組み立ての話へと続いて行きます。心理士や精神科医で、私が知らないだけかもですが、あまりこうしたメタファーの出し方といいますか、言葉のチョイスをする人はいない気がします。文の種類から対人関係をメタファーするという秀逸な言い回しを思い出しました。「否定形疑問文」による言い回しが、いかに母子間の関りを行き詰まらせるかというものです。母親から息子・娘に向けられる叱責パターンです。「どうしてあなたはいつも〇〇できないの？」この後考えられるのは息子・娘からの「だって△△だったからしかたないじゃん」あたりですか。でも、返しはお約束で「ほらそうやって、いつもいつも言いわけばっかり」いつもではないはずですが、否定形疑問文的コミュニケーションが優位な場合は、「いつも」ということが前提とされます。岡田隆介的ワールドによるメタファーだなと感心させられます。

コンテキストを前提とせずとも、名詞・動詞・助詞や形容詞のレベルでも岡田さん独自のものを感じずにはいられません。一例を挙げると「マシ」「そこそこ」「ほどほど」「うすめる」「クセ」「コツ」「目線」「結末」「思春期モード」「ねぎらい」などなど。日本語であり、何げない言葉の羅列ではありますが、紛れもない岡田 Word です。

ところで一部の事実と、あとはほとんど好き勝手な思い込みと、推量とで、ご本人の許可も取らずにこんな文章載せていいのかしらと、いくらリスペクトありとは言え、ハタと不安になり電話してみました。ほとんどメールやＬＩＮＥのやりとりばかりですから、ちょっとびっくりされてましたが、掲載許諾が下りましたので、安心して続きは次号でとのことで、ここで私説「岡田隆介」論第 1 部の終了です。拝読ありがとうございました。